# 熊本の貴重な宝「肥後六花」

わたしたちの熊本には、「肥後六花」という貴重な宝物が大切に受け継がれています。肥後六花の歴史やそこに込められた高い精神性について学びましょう。

## 肥後六花とは？ （どんな花があるの！）

肥後朝顔
（ひごあさがお）

肥後菊
（ひごぎく）

肥後椿
（ひごつばき）

肥後山茶花
（ひごさざんか）

肥後芍薬
（ひごしゃくやく）

肥後花菖蒲
（ひごはなしょうぶ）

## 肥後六花の特徴（とくちょう）とは？ （何がすごいの！）

六花に共通する特徴としては、「端正な一重咲きで優美な花芯、清らかな色」であることです。

「花連」と称する肥後六花それぞれの保存団体の厳しい規律と武士の誇りのもと、苗と種は、「門外不出」の宝として厳しく守り継がれてきています。

肥後六花の栽培方法や鑑賞方法は、それぞれに独自の作法が伝わっています。「肥後六花」は、先人たちが守り伝えた美と修練の結晶です。季節ごとに美しく咲き誇る花々からは、昔の人たちの思いを感じることができます。

※一重咲き…花びらが重なり合っていない状態

※花芯・・・花の中央部分のこと

# 肥後六花の歴史とは？

（いつから育てられているの！）

・肥後六花の歴史は古く、いまから２５０年ほど前の、江戸時代までさかのぼります。熊本藩のお殿様、六代藩主・細川重賢公が、家臣（武士たち）の精神修養に園芸を奨励したことに始まったといわれています。
・その頃は、肥後の花と呼ばれるものが、３０種ほどあったらしいそうです。
・その後、昭和３５年に昭和天皇の天覧を機に、肥後名花会が発足し、四季を通して見ることができる六花を決めて、「肥後六花」と呼ぶようになったそうです。

## 肥後朝顔の歴史

肥後朝顔が、いつどのようにして始まったかは記録が見当たらずよく分からないということです。
しかし、昔ながらの作法を守りながらこの端正で優美な花作りを継承するため、明治３２年に肥後朝顔涼花会（保存会）が結成され、百年有余にもわたり活動が続けられてきています。

## 肥後椿の歴史

肥後椿が、いつの頃からどのように栽培されるようになったかは文献上に明らかにされておらず、正確な時期は不明です。最も古い記録では、1829 年に書かれた「江戸白金植木屋文助筆記」の中で、鉢植え培養法等について記録されているそうです。
古木の樹齢から推定しても起源はかなり古いと思われます。

## 肥後山茶花の歴史

肥後山茶花は、第八代藩主細川重賢公が 1756 年に、御薬草蕃滋園において薬種として栽培させたという記録があります。薬種、油脂としての栽培から、花の美しさに魅せられて、次第に観賞用となっていきました。数が少なくなりつつある純品種の肥後山茶花を保存する目的で、「肥後さざんか協会」が設立され、保存、改良、普及に努められています。

## 肥後菊の歴史

文政二年(1819)には、肥後菊栽培の花祖と呼ばれる藩士秀島七右衛門が、肥後菊栽培要綱を指示した「養菊指南車」を著しました。そこには、肥後菊の花壇作法が定められており、明治二十年、肥後愛好者によって「愛寿会」が結成された後も固持され、現在に至ります。
現在作られている肥後菊花壇作りは、秀島流に依ったものです。

## 肥後芍薬の歴史

芍薬（シャクヤク）は中国が原産で、牡丹（ボタン）とともに中国で隋の時代から栽培されていた古い園芸植物です。日本に渡ってきたのも古く、日本で中国以上の園芸化が進められました。
肥後六花の中でも最も古くから栽培されています。
現在ではわずかな人によって保存されています。

## 肥後花菖蒲の歴史

熊本藩主・細川斉護の家臣・吉田潤之介が江戸の旗本・松平左近吾定朝（菖翁）に弟子入りして一生懸命努力したことが認められ、天保四年（1833 年）に「門外不出」を約束に５品種の苗を分けてもらいました。これが肥後花菖蒲の起源だと言われています。この時の「門外不出」の約束を守り続けているのが満月会です。

【参考文献等】各保存会作成のパンフレット及び「熊本県植物誌」熊本記念植物採集会編、ふるさとシリーズ②「肥後六花」熊本日日新聞社発行を参考に作成